

# 一片の氷、玉壺にありや？

公文書界隈を徘徊する

福井 ひとし

第一〇回

雪のむら消え (上)

文官たちの「二・二六」

本稿の紹介

唐の詩人・王昌齡は赴任先の辺地から、友人たちに言い送った。「一片の氷心、玉壺に在り」(おれは、ひとかけらの氷のように透明な心を、玉のように穏やかな精神の中に入れた——そんな澄み切った気持ちで今はいると。

そんな気持ちでいることは、欲望や悩みに汚れた生身の人間には簡単ではない。しかし、文書にサインや押印

する、その一瞬の中になら、透明なものが見つかるかも知れない。過去の歴史の一面に、誰かの透明な思いが残っているのではないか。・・・と思って、公文書の森を徘徊します。今日は何か見つかるでしょうか。

三月号でちょうどいい

今年は「二・二六事件」から九〇年になります。二月号にはこの事件について何かを書きたい、とずっと思っていたのですが、豈図らんや、一・二月が合併号で、二月号が無いとは。しかし、二月二十六日に起こった事件について岡田内閣が「事件は鎮静に帰した」と「声明」を発表したの

が三月一日ですから、三月号でちょうどいい・・・というわけで、春の訪れたこの季節、どうぞ筆者の「公文書徘徊」にお付き合ってください。

ところで、本稿は、「二・二六事件」について、何か新しい事実を提示したり、その歴史的な意義について語る、といった立派なものではありません。あくまで、国立公文書館の「行政文書」の中から、事件の協役やその他大勢として働いていた内閣や各省の文官たちの動向を垣間見てみようというものです。蹶起部隊や軍、宮中の動向についてはほとんど触れません。(宮内官僚には少しお世話になります)。

最初に、事件の勃発からのタイムテーブルをごく簡単に整理しておきます。

二月二十六日(水) 午前五時ごろ 蹶起部隊が首相官邸等を襲撃

二月二十七日(木) 午前三時ごろ 戒厳令の一部を施行する緊急勅令公布

二月二十八日(金) 夕刻 岡田総理参内 (公表は翌日)

二月二十九日(土) 午前六時ごろ 戒厳司令部が武力解決を決定

午前八時四八分「兵に告ぐ」ラヂオ放送  
午後二時ごろ 戦火無く鎮定

三月一日(日) 岡田内閣「政府声明」公表

三月九日(火) 廣田弘毅内閣成立

七月一八日(土) 戒厳「解除」(一部施行勅令の廃止)

(内閣官房総務課関係資料「二・二六事件」所収の「中央公論 二・二六事件日誌」等を参照しました。)

## 二人の元官僚

まずはこんなお二人の会談を読んでみてください。

横溝 やア、久しぶり。相変わらずお元氣そうで何よりです。

安倍 あんたはぼくよりずっと若いだろう。学校は、ぼくは遅れたから、あまり違わないと思うが・・・。

横溝 そう。君の方が一つ先輩だ。

先輩後輩にはなかなかフランクな御挨拶ですが、この二人は、元内閣情報部長・横溝光暉さん(昨年一二月号

で内閣情報委員会・情報部を取り上げた際に紹介させていただきました)と終戦時の内務大臣・安倍源基(①)さんです。

横溝さんは明治三〇年生まれ、大正一〇年帝大卒、内務省、安倍さんは明治二七年生まれ、大正九年帝大卒、内務省入り。歳は安倍さんが三つ上で、大学卒業と内務省入りは一年違い、二人の記憶には間違いありません。

正直、戦前の先輩後輩の官僚が久しぶりで出会った時に、



①「御署名原本」昭和二十年・詔書八月十四日「大東亜戦争終結二関スル詔書」。左から四人目、「内務大臣 安倍源基」の署名があります。

こんな風にフランクに会話するのか、というのに新鮮な驚きを感じます。この会話は、昭和五三年七月のもの（『昭和への遺言』所収）ですから、誕生日を迎えているとすると、安倍さんが八二歳、横溝さんが七九歳になります。少々先の輩後輩はもうどうでもよくなっているのかも知れませ

ん。

この対談、二人で昭和の動乱期の思い出や戦後の新憲法

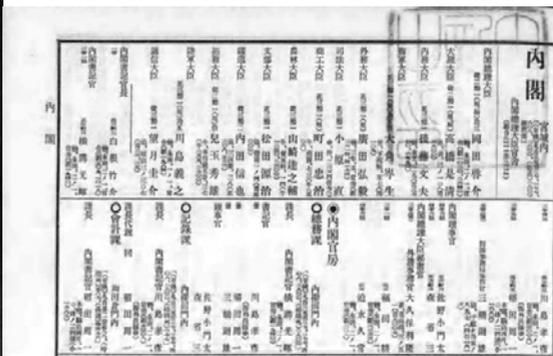
体制への愚痴をこぼしていくのですが、実はこの二人は、対談の約四〇年前、二・二六事件の発生を最も早く知った人たちなんです。横溝さんは、内閣官房総務課長として、午前五時ごろの首相官邸敷地内の宿舍で襲撃を受けた当事者です。安倍さんは当時警視庁特高部長、午前五時過ぎ、警視庁襲撃の第一報を受けました。一方の二人はそれぞれ組織の責任者として、昭和史だけでなく、近代日本の最大の政治事件というべき、二・二六事件に立ち会った官僚なので、まずはこの二人を通じて、事件に直面した「文官」たちの姿を覗いてみましょう。

### 内閣官房総務課長の回想

まずは横溝さんの方から。横溝さんは当時内閣官房総務課長②として官邸内裏門に近い書記官住宅に住んでいました（住所は「永田、二ノ一 官舎」）。横溝さんの回想によれば、彼は奥さんに起こされた。

・ ・ ・ 「何だか火事のようにですよ」といふ光子の声に起きて硝子戸からのぞいて見れば、裏門前で剣戟の音、銃声あり、機関銃のパチパチいう音は丁度近火の焼ける音のようである。 ・ ・ ・ （昭和史片鱗）

護衛の警官が抵抗していた時点なのでしょう。とりあえず出勤用の服に着替えますが、部隊が住宅の周りを固めていて身動きがつかないので、電話を使って稲田周一書記



②職員録・昭和十一年一月（一月一日現在）「職員録」（以下、単純に「職員録」として引用します）。右は「内閣」（部分）。下の段の真ん中あたりに「内閣官房総務課課長 内閣書記官」の横溝さんがいます。

官らに宮城内出勤を命じました。現在の内閣官房は総理官邸やその向かいの内閣府庁舎などに入っていますが、②を見ていただくと、当時、総務課と記録課が「内閣門内」、会計課は「和倉門内」、いずれも宮城の中にありました。さらに細かくみてみますと、稲田書記官（会計課長）の自宅住所は「駒込 西片」、横溝さんと違って出勤は出来そうです。横溝さんは彼らの出勤後に各大臣の安否確認を指示するなど、この間、電話にかかりきりだった、と言っています。この時間帯の事務的な会話は盗聴をあまり気にしていなかったようですが、

・ ・ ・ そのうちに迫水、福田両秘書官が漸く日本間に焼香に入り、さうして岡田首相生存の事実を確かめてきた。

この後の岡田啓介総理の脱出劇は、ご本人の『岡田啓介回顧録』や迫水久常秘書官の『機関銃下の首相官邸』をお読みください。なお、どちらも終戦工作の中心人物でもありますから、やはり蹶起部隊は、重傷の鈴木貫太郎特使長を含め、重要人物を討ちもらしたと言わざるを得ないでしょう。

さて、このため、横溝課長は、

・ ・ ・ 首相生存を極秘にして種々のことをせねばならなかった。

総理大臣臨時代理の任命方式の選択と死亡者への叙位叙勲の延期を、宮城内で内閣官房総務課長業務を実質代行し

③「職員録」より「警視庁」(部分)。上段左端に「特別高等警察部 部長」として安倍さんがいます。

ている状況の稲田さんに指示しなければなりません。しかし、総理が生きていることを蹶起部隊に知られると、せっかく生きている(女中さんたちが押し入れの中に隠していました)総理を再捜索して殺害してしまう可能性がありません。一方、総理がいまままだと閣議さえ開けませんが、代理を天皇陛下から任命してもらわなければなりません。生存・死亡を公表せずに手続きをする必要があります。

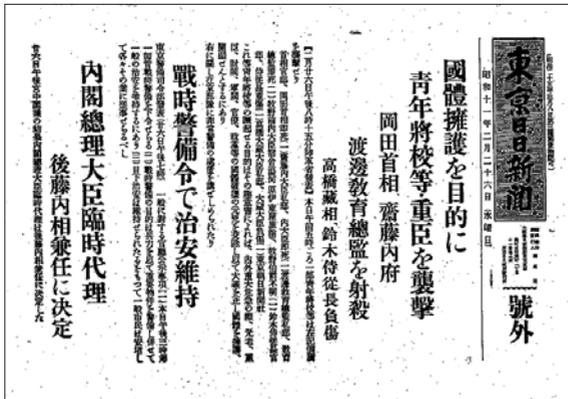
す。また、<sup>さいとうまじ</sup>斎藤実内大臣や<sup>たかはしひさきよ</sup>高橋是清大蔵大臣が亡くなっていますので、位階や勲章を追贈しなければならぬ(形式的には生きている間に発令する決まり)。しかし、その対象に岡田総理が含まれていないことが知られてしまうと、やっぱり総理を再捜索してしまうでしょう。横溝さんは、二七日午前二時ごろまで、戒厳令の発布を含めて官舎の中から多くの指示をして、それからしばらく眠ったようです。一二月号でも触れましたが、いい度胸してますよね。

### 警視庁占拠さる

同じころ、安倍警視庁特高部長(③)の麴町隼町官舎では、

・・・二十六日午前五時すぎ、警察電話が枕元でりんりと鳴り響き冬の眠りをさました。警視庁宿直からの電話で、いま本庁は機関銃を持った武装兵に取り巻かれている。電話を聞きながら直感的に頭に浮かんだのは、「一五・一五事件とは違う」ということであった。(『昭和動乱の真相』)

今回は陸軍の部隊が動いている、したがって、その鎮圧は軍でなければならず、さらに警視庁(政府)と叛乱軍の間の衝突が起これば、そのニュースが各地の軍を刺激して警察対軍の全国的な動乱を招いてしまう可能性がある、と



④東京日日新聞（現毎日新聞）昭和十一年二月二六日・号外。二六日の朝刊はもちろん、夕刊にも事件の報道はありません。第一報の「号外」は、よく読むと、午後八時一五分の陸軍省発表に基づいています。それまで、新聞統制がなされていたのでしょう。

ということですが。そこで安倍はすぐに旧知の憲兵隊長に連絡を取って、反乱軍の鎮圧は軍に任せること、警視庁は民間の治安維持に当たることを独断で提起して了解を得ました。警視総監に報告するのは事後になりましたが、これで警視庁の当面の方針は決まりました。そのあと、内務省に電話して、新聞差止めめの処理（④参照）、後藤内務大臣への報告などを依頼、

所持金の全部と貯金通帳をポケットに入れて・・・、小栗（一雄）総監以下幹部が麹町警察署に集合しているので、私も同署に赴き、これまで採った緊急措置を総監に報告して、その了承を得た。（同書）

所持金持っていかれたらご家族は困ったかと思いますが、しようがない。

その後、警視庁は錦町警察署（現・神田警察署）に本部を移して、内務省警保局と連絡を取りながら、警視庁占拠隊を含む蹶起部隊との対応を軍に任せ、都内の交通の平常化、思想団体の動きや流言飛語の情報収集、関与した民間人の身柄確保などの対応に専念します。

### 「叛乱事件通牒」

国立公文書館に「米国からの返還文書」（青）という文書群があり、その中に、「叛乱事件通牒（昭和十一年二月）保安課」と題する内務省関係文書があります（⑤）。国立公文書館デジタルアーカイブで350画面超の文書で、二月二六日から七月一七日の「戒厳解除」までの警保局と外部とのやりとり（口頭連絡のメモ含む）と、一三年一二月までの関係者仮出獄の情報綴じたものです。

⑤を開いてみると、最初に事件発生の各方面への通知メモ（⑥）が出てきます。二行目（一）書きで「秋吉事務官宅より」とあって、秋吉さんが自宅からこの内容を各地に

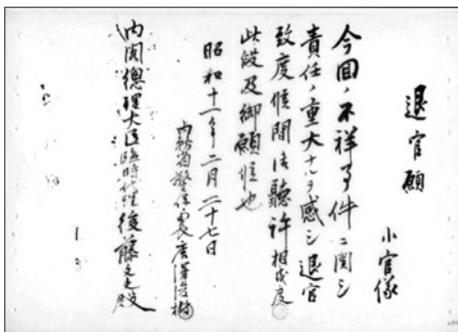




⑧上は事件当時の錦町（神田）警察署。『神田警察署史』から。下は現在の神田警察署（筆者撮影）。

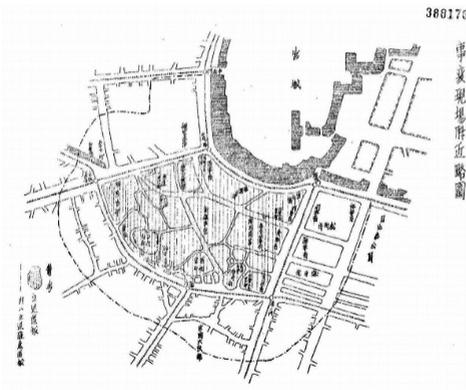
錦町署（神田署）には特設通信線が準備されており、  
 ・ ・ ・ 多分午前一〇時前後と記憶しているのであるが、  
 これによって今迄危険にさらされ不安の中にあつた本庁の  
 通信線を通せず、直接管下警察署その他の連絡を確保：  
 できたそうです。（神田警察署史）

ところで、実は二六日朝、警保局長の唐澤俊樹からさわとしきさんは東京にいなかった。このことには、安倍さんが著書の中でも批判めいた発言をしています。休暇ではなく、京都で開催された全国特高課長会議に出席していました。各府県の特高課長も京都に集まっており、③の下段、軍の不穏な動きを追いかけていた警視庁特別高等課長・毛利基もうりもとさんも京都において、事件勃発を聞いて夕方までに錦町署に戻ってきて



⑨「任免裁可書」昭和十一年・任免卷三十三「休職内務省警保局長唐沢俊樹外一名免官ノ件」添付資料

います。したがって、秋吉さんの⑥の電話は各地の課長代理たちに対して行ったのでしょうか。  
 唐澤さんの翌二七日付けの退官願（⑨）が残されています。実際の退官は事件が終息し廣田内閣が成立後の四月二二日になりました。もともと内務省の警保局長は、次官、警視總監とともに「内務三役」とも言われ、内閣が変わると交代を打診する先例になっていたようですが、退官願を見るとやはり事件対処に思うところがあつたのでしょうか。



⑩「米国から返還された公文書」中「(返青)内務省等関係」中「叛乱事件通牒」中三月二日付け警保局長名府県長官宛「帝都における叛軍部隊の騒擾に関する件」中「事変現場附近略図」(「中」が多くてすみません)

## 蹶起部隊の占拠区域

蹶起部隊は赤坂見附から溜池、虎ノ門を経て桜田門に至る永田町・霞が関一帯地域(⑩)を占拠しました。

図中の「宮城」が今の皇居、そこから図の左側(西)に向けて開いているのが半蔵門。そこからお濠に沿って下(南)に突き当たり、さらに左(図では右、東)に曲がっていくゆるいカーブが三宅坂(⑪—イ)。突き当たったところ、今は国会前庭(国立公文書館の新館を建設中!)で



⑪—ロ 現在の総理官邸裏口(溜池側)。ずいぶん様子は変わっているはずですが、横溝課長らが入りしていた通用口はこのあたりにあったはず。



⑪—イ 現在の三宅坂(左手から来て左にゆるく曲がっていく道)を最高裁前から見る。真ん中から右寄りに国会方面に上る道があります。その左手に当時陸軍大臣官邸と陸軍省がありました。ちょうどその跡地に新国立公文書館建設中で、クレーンが見えます。真ん中あたりの鉄塔が桜田門前の警視庁です。



⑪一八 現在の霞が関官庁街。左手前の財務省（大蔵省）庁舎は当時まだありません。その左奥は文科省（当時の文部省）。右側手前は外務省、その向こうの背の高いのが現在の第二合同庁舎（当時内務省）。その右の陰に見えるのが警視庁です。



◀⑪一おまけ 現在の首相官邸の隅にある旧内閣総理大臣官邸。事件の際の弾痕が残り、一時期は見学ができたのですが、今は立ち入り禁止です。塔の上に小さく突き出て見えるのは、四羽のみみずく。眠ることなく知恵の目で世界を見まわしている、という……。あ、そうか、新官邸になってからはこれがないから……。  
⑪一イ、ロ、ハ、おまけは筆者撮影

すが、当時は陸軍大臣官邸と陸軍省。三宅坂をずっと行って桜田門に向かつて突き出した端が警視庁。警視庁の南側に内務省（現在第二合同庁舎）。左の方、都電の赤坂見附を下（南ですが）に曲がって、占拠地域に沿って南下すると、山王ホテルの前を経て溜池のところまで首相官邸の裏（⑪一ロ）に出ます。さらに行くくと虎ノ門、文部省の前に出ました。ここから北に向かう霞が関官庁街（⑪一ハ）は左側（西側）は占拠区域に入っていますが、通りを隔てて、司法省、海軍省などは歩哨線外です。

### 内閣官房総務課奮戦中

内閣官房総務課が事件後に「二・二六事件」という資料集を取りまとめています（「内閣総理大臣官房総務課資料」に所属）。その中に、佐野小門太さん（②）に「内閣理事官」として記載。終戦の詔勅を書いた人としても有名です）の「日誌」（⑫）があります。

⑫を見ると、左端の方の（四）に

白根内閣書記官長・横溝内閣官房総務課長ハ各自ノ官舎ニ在リ（出ヅル時ハ危険ノ

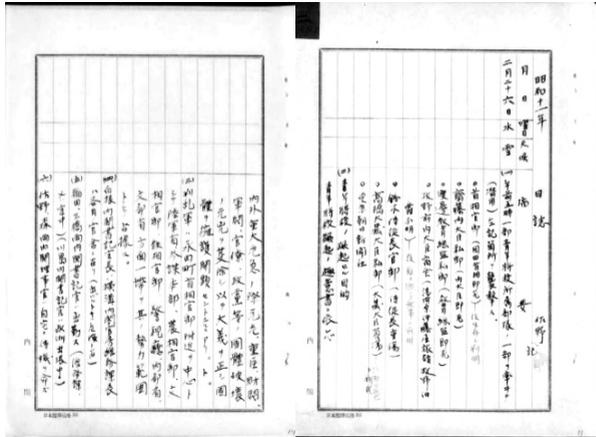
為

とあり、横溝さんが官邸内にいたことが証明されます。他の人たちは、

(五) 稲田、三橋両内閣書記官ハ出勤ス(総務課又ハ宮中)

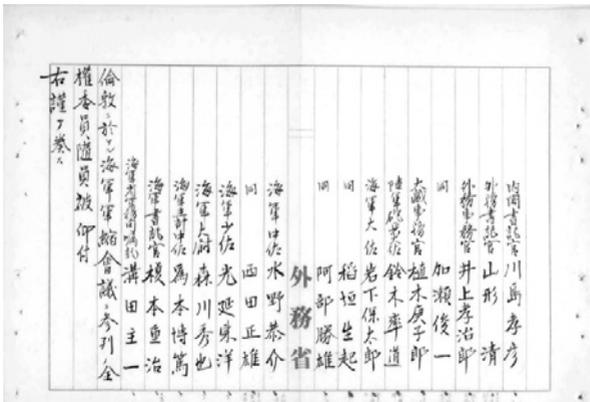
(六) 佐野・森内閣理事官 自宅待機ヲ命ズ

となっているので、佐野さん自身は当初自宅待機を命じ



⑫「内閣官房総務課関係資料」[二. 二六事件]中「日誌(佐野記)(総理大臣自二. 二六至九. 二)」(二月二六日朝部分)

られていたようです。なお、もう一人の内閣書記官で記録課長の川嶋孝彦さん(一二月号でご紹介済み)はこの時海外出張中(五の括弧内)。海軍軍縮条約を破棄することになった(第二次)ロンドン海軍軍縮会議の代表団(⑬)に加わって帰国途上になりました。



⑬「任免裁可書」昭和十年・任免巻八十四中「内閣書記官川島孝彦外十五名倫敦ニ於ケル海軍軍縮會議ニ參列ノ全権委員隨員被仰付ノ件」(昭和一〇年一月五日)中外務大臣から総理への奏上書。川嶋さんが右端にいます。他にも、戦後の国連大使・加瀬俊一<sup>か せ と し か ず</sup>、田中角榮内閣の大蔵大臣・植木庚子郎<sup>う え き こう じ ろ う</sup>など有名人が目白押しではありませんか。

## 稲田書記官の困惑

横溝総務課長の電話連絡を受けながら宮城内の内閣官房を切り盛りしていた稲田書記官は戦後に昭和天皇の侍従長もされる方ですが、「内閣総理大臣官房総務課資料」の中にタイプ打ちされた「稲田内閣書記官手記」を残してくれています（⑬に後掲）。

当日はまず横溝総務課長からの電話で起こされ、用意をして宮城内の内閣庁舎に出勤、直接の先例である五・一五事件の記録などをチェックして、さらに襲撃された重臣らの経歴を確認（叙位叙勲事務のため）しているうちに、児玉拓務大臣をはじめとする閣僚たちが集まってきはじめた。閣議を開くにも総辞職するにも総理が必要で、岡田総理が亡くなった？以上、臨時代理を置かないといけないという声が出始める。席次から見て首相代理になるべき後藤（ごとう）文夫内務大臣がなかなかやってこない・・・午後になつてから参内、最後に小原直司法大臣が来て、閣僚が揃いました（岡田総理、高橋蔵相はいませんが）。そこでようやく、宮内省の二階二室を借り、奥の方の部室を閣議室とし、広い方の次室を秘書官、属僚の控室として、早速閣議を開いた。まづ、いまだ確認はされてゐないが、岡田首相の死が伝へられてゐる。従つて総理大臣代理を設ける必要がある、それで先任の後藤内相が総理大臣臨時代理に任命され

閣議が続行された。（町田忠治翁伝）

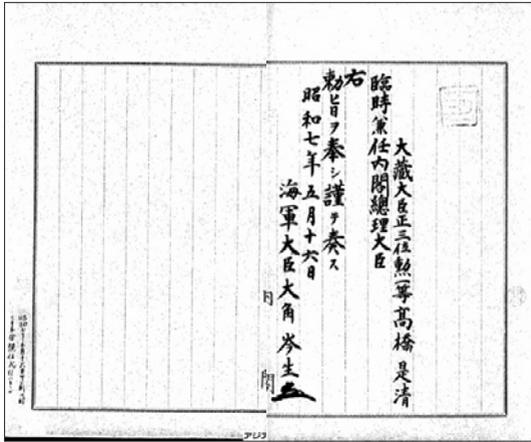
稲田書記官は、横溝課長の指示を仰ぎつつ、臨時代理任命の決裁を起こします。⑭と⑮、今回はどちらの型の決裁を作成すべきでしょうか。

横溝課長の指示は⑮です。⑭と⑮を見比べてみると、⑭五・一五事件での高橋是清さんは「臨時兼任」、一方、⑮二・二六事件の後藤さんは「臨時代理被仰付」です。この決裁を進めていくと、事務方から、「⑮はおかしい（出張や病気の時の書き方だ）」という意見があり、

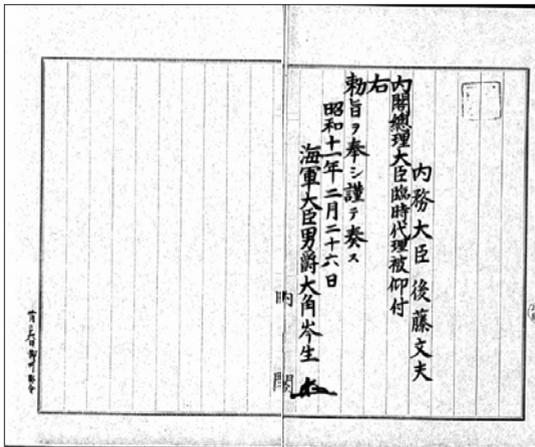
稲田書記官が「わたしに任せて欲しい」と言ったら「任せられない」と言われた・・・（昭和史片鱗）

そうです（横溝課長の記録です）。法制局参事官からも念のための注意があつたとのこと。しかし、総理は生きているので、⑭で出してしまつたと総理が二人いることになつてしまふ（わざわざ岡田総理の罷免を行えば別ですが）。総理が生きているとは公言できない。このため、「課長の指示」として⑮で押し切つたそうです。

ところで、⑭⑮どちらも上奏者が大角岑夫海軍大臣おおすみねおになつていたので、総理が欠けた場合の上奏は海軍大臣がやるのかと思つてしまふかも知れませんが、どちらもそれぞれの内閣の閣僚の「宮中席次」で大角さんに決まつているだけです。ということは、もし蹶起部隊が後藤内務大臣の



⑭公文別録「親任官任免」明治二二年～昭和二二年第六卷・昭和五～昭和八年中「臨時兼任内閣總理大臣大蔵大臣 高橋是清」（昭和五年五月一六日）

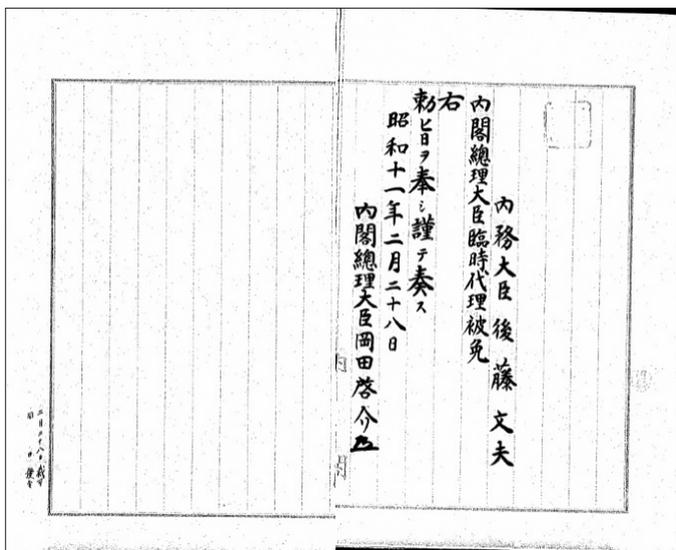


⑮公文別録「親任官任免」明治二二年～昭和二二年第七卷・昭和九年～昭和一二年中「内閣總理大臣臨時代理被仰付 内務大臣 後藤文夫」（昭和一一二年二月二六日）

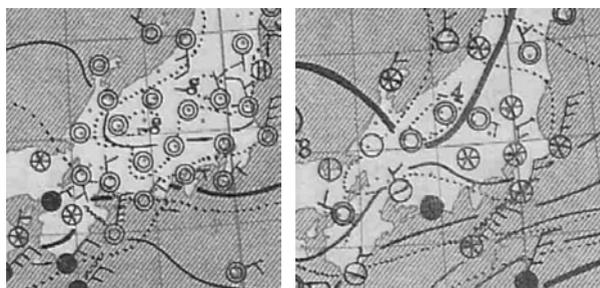
襲撃に成功していたら、大角海軍大臣が兼任又は臨時代理になった・・・。大角さんのことはまたの機会に。  
 首相代理が決まったので、閣議が開けます。この日の閣議では、まず後藤臨時代理以下閣僚の辞表を取りまとめ。また、陸軍が望む戒厳令を発するか否かを大激論、結局一部施行という形で妥協しました。

### 内閣總理大臣出現

二七日には、岡田総理が官邸を脱出。知人のところまで一夜を過ごしします。総理脱出後、横溝総務課長も官舎を抜け出して、宮城内の内閣官房に出勤。  
 二八日、総理が参内。後藤さんの「代理被仰付」を免じて内閣總理大臣に復帰(16)。



⑯公文別録「親任官任免」明治二二年～昭和二二年第七巻・昭和九年～昭和一二年中「内閣総理大臣臨時代理被免 内務大臣 後藤文夫」（昭和一一年二月二十八日）。後藤臨時代理の解任（「被免」）は本物の総理が上奏しています。



⑰国立国会図書館デジタルコレクション「天気図」昭和一一一年二月（左：二六日六時、右：二六日一八時）

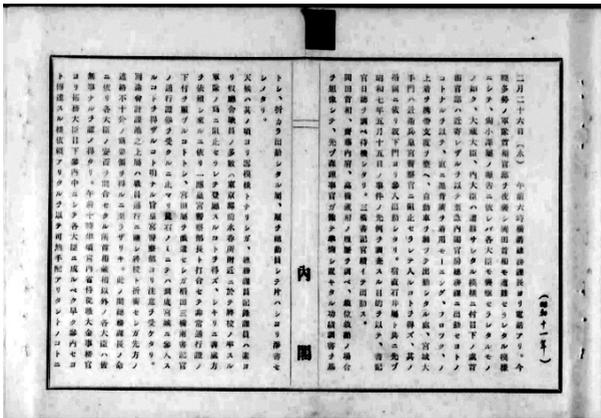
## 雪は降っていたのか

佐野さんは⑫で、この日の天気を「雪」と書いていました。国会図書館のデジタルコレクションから東京気象台の公表天気図（毎日午前六時と午後六時）を追いかけていくと、この年の二月は雪が多く、東京でも直前は二月二三日

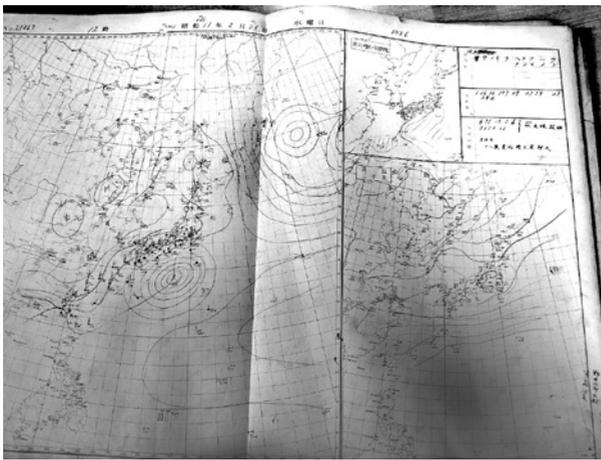
に記録的な降雪がありました（「気象百年史」によれば都内で35・5センチの積雪とのこと）。その後二六日朝（⑰左側）にかけては降雪の記録が無いので、雪は降っていただけでなく、二三日の積雪を踏んで蹶起した、ということになります。一方二六日夕方（⑰右側）を見ると関東地方はまた雪のマークになっています。

この雪はいつごろから降り始めたのだろうか。

「稲田書記官手記」⑱



⑱「内閣総理大臣官房総務課関係資料」[二、二六事件]中「福田内閣書記官手記」



⑲「天気図原図 (第一図)」昭和十一年二月 (二六日一二時)

を読んでいくと、(朝)内閣官房の職員が東京駅から宮城内庁舎に入らず、皇宮警察と調整を図っているうちに、天候ハ其ノ頃ヨリ雪模様トナリシガ、(同)左側三行目

とあった後に、  
 ・・・午前十時半頃宮内省侍従職大金事務官ヨリ拓務大

臣目下参内中ニシテ(同、後ろから三行目)

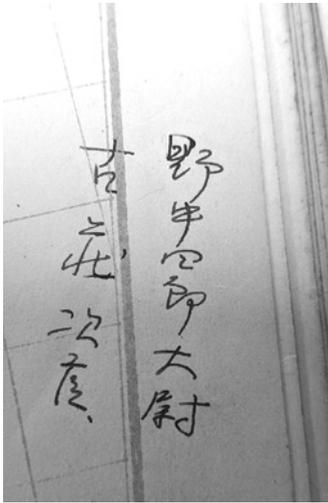
という連絡が入ったとあるので、雪模様になったのは午前の早い時間だとわかります。

公表された天気図は朝と晩の二回だけですが、実際にはお昼一二時にも天気図を作成していたらしいので、国立公文書館つくば分館から、公表用ではない「天気図原図」(⑲)を取り寄せて見ました。

一か月ごとに綴じられている分厚い冊子の「二六日一二時」の図を開くと、小さくて申し訳ないのですが、この時間になると既に東京は雪の表記(この図では緑の塗りつぶし。雨だと黒の塗りつぶし)になっていました。お昼前には雪になり、その後夜まで降り続いた、ということが天気図からわかりました。

ん？ ⑲の原図、何やら書き込みが。気づきましたか。

右下の端を拡大してみる(20)と、二人の名前が書かれています。蹶起の中心人物の一人で「蹶起趣意書」を書いた「野中四郎大尉」(二十九日に自決しますが、この日は第三步兵連隊の部隊を率いて警視庁にいないはず)ともう一人は「古莊次席」と読めます。関連する人には陸軍省の「古莊幹郎」次官がいますが、二六日の、まだ報道統制のある午後の時点でこの二人の名前を並べてメモしているのはなぜなのか、作図者がどこかでこの二人の名前を耳にしていたということなのか。中央气象台(現气象台)は大手町にあって、近衛師団や皇居とは至近の距離でしたから、何か流言のようなものがあつたのかも。このあと、二六日の雪は二七日には晴れますが、二八日はふたたび降雪があつたようです。



20 19右下書き込み拡大

そのころ各省はどうしていたのか

各省	状況
北海道	...
東北	...
関東	...
中部	...
近畿	...
四国	...
九州	...

21 「内閣総理大臣官房総務課関係資料」「二. 二六事件」中「各省状況調(昭和一一. 二. 二八午后三. 三〇)」



昭和一一年度予算編成は、財政規律を守るための高橋蔵相と大蔵省にとつての正念場であった。だが、陸軍に対する財政当局の必死の戦いは悲劇的な結末を生んだ。．．．二月二六日午前六時少し前、福田は、けたたましい電話のベルでたたき起こされた。それは内務省の文書課長からであった。高橋大臣が陸軍の軍人たちに襲撃されたとの一報である。

福田事務官はこのあと雪の中をなんとか出勤、大臣秘書官に電話をかけて、高橋大臣の最期を聞く。次の廣田内閣に入ると、馬場鐵一ばばていいち大臣が積極財政路線を取り、一二年度予算は二二億円から一気に三〇億に増え、

もはや福田のような一事務官の力ではいかんともしがたい状況になっていたのである。

という状況になっていきます。

すんません、言い忘れてました。この年は、今年と同じで一月解散でした。多数派だった政友会の内閣不信任に対する解散で、二月二〇日に衆議院議員総選挙があり、岡田内閣与党であった民政党の勝利になっています。というわけで、高橋蔵相が心血注いだ昭和一一年度予算は成立していません。明治憲法下では、予算の成立がないときは「前年度予算」が適用されます（明治憲法第七一条）ので、現憲法下のように暫定予算を組んで国会の了解をもらわなくても、四月からも政府の通常業務には問題がありません。

した。ただ、一〇年度と同じ予算では不足が出るので、廣田内閣は五月の第六九回国会に「追加予算」を提出し、結果として不成立だった高橋大臣時の予算案を数千万円上回る実行予算に変更しました。

廣田内閣成立前、岡田内閣において欠けてしまった大蔵大臣には、二七日朝、町田忠治まちだちゅうじ商工大臣が兼務（即時辞表を出して、廣田内閣組閣までの間両大臣業務を実施）しましたが、宮中で借りただぶだぶの礼服姿で認証式に向かった町田大臣は陛下に一言、言上したようです。

町田は金融方面の悪影響を非常に心配して断然たる所置を採らねばパニックが起こると忠告してくれたので、強硬に討伐命令を出す事ができた。（昭和天皇独白録）

昭和天皇の御決断の後押しをしたことになったのでしょうか。町田大臣は二七日お昼に津島次官と面談して為替事情などを聴いているのですが、陛下と話すには認証の時にしかチャンスは無かつたはずなので、彼自身の判断だったのだらうと思います。

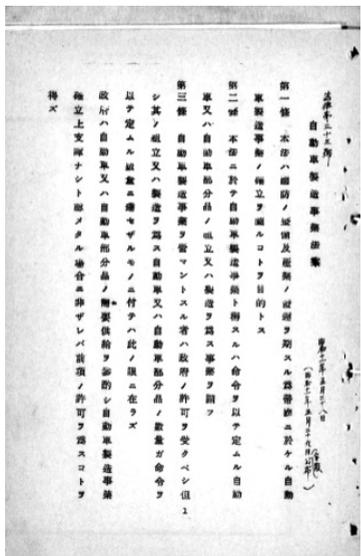
## 商工省

町田大臣の本務であった商工省は京橋区木挽町、銀座にありましたから、占拠区域外です。②には、本省は貴衆両院事務局より立ち退き来たりたる外、変わりなし。特許局、鉱山監督局幹部は本省へ引き上げ、他は



で死去。

②4の法案は、四月二八日付け決裁で閣議請議され、第六



②4通商産業省「閣議等関係文書・法律・昭和11年」中「自動車製造事業法案に関する件・法律」

九国会で成立、五月二十九日公布されました。昭和十一年法律三三号。

第一条 本法は国防の整備及び産業の発達を期する為帝國に於ける自動車製造事業の確立を図ることを目的とす  
だそうです。

結局、機械・設備を外国から買って、自動車製造を許可事業にして、トヨタと日産を保護したわけですね。〔岸信介の回想〕

その他の役所は

②1でその次は陸軍省、海軍省ですが、軍人の動向は省略。司法省は、

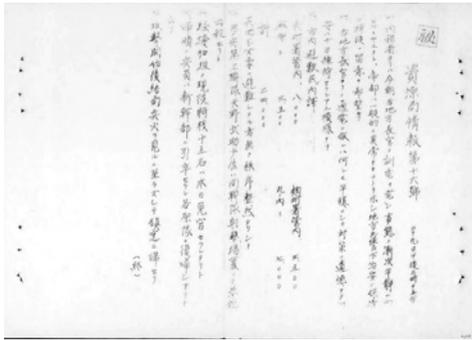
急迫の際、次官、人事課長は市ヶ谷刑務所へ立ち退くこととし、他は帰宅せしむ——午後一時十分——

当時の司法大臣は小原直。檢察畑の司法官です。このひとの「回顧録」は事件下の閣僚たちの様子がよくわかってほんとにありがたい。岡田総理が生きていた、と知って「なぜ自殺しないのか」と言った閣僚は名前が伏せられているのですが、誰だったのでしょうか。そのほか、現役検事時代に扱った難事件、猟奇的事件の記述もあります・・・が、この調子でやっていくと字数がたいへんなことになるので、②1の文書はここまでにさせていただきます。

資源局情報

「内閣総理大臣官房総務課関係資料」中の「二・二六事件」に「雑」という題名の文書があります。官邸の被害写真なども入っている興味深いものなのですが、その中に、内閣資源局（あるいは一緒に避難していた内閣調査局が関係しているかも）が各方面の情報を集めて関係者に届けていたものが残されています。

②5は「地方長官」からの情報だそうですから、東京府か



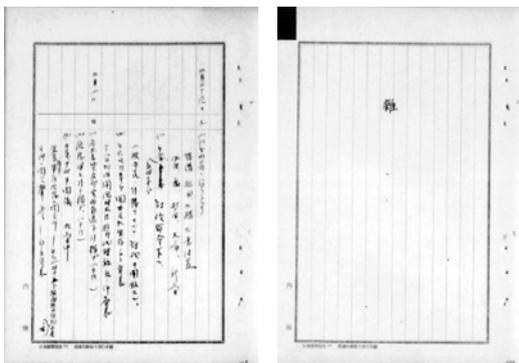
②5 「内閣総理大臣官房総務課関係資料」 「二・二六事件」中「雑」中「資源局情報第一六号」（二九日午後三時一五分）

②6 「内閣総理大臣官房総務課関係資料」 「二・二六事件」中「雑」中「資源局情報第一七号」（二九日午後三時）

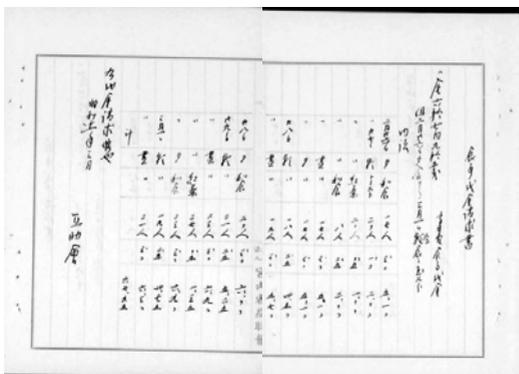


②7 「内閣総理大臣官房総務課関係資料」 「二・二六事件」中「雑」中「資源局情報第一九号」（二九日午後四時半）

らの情報を資源局が伝えてくれたものだと思いますが、市内の避難民二万四千人とのことです。結局、「攻撃開始後結局兵火を見るに至らずして鎮定に帰せり」。よかった。②6は商工大臣官房の調査結果。卸売物価では二九日になって米穀が多少の騰貴、小売りでは鶏卵・小麦粉が一割、金地金は「俄然騰貴を見たり」とのこと。やっぱり金なんだなあ。②7は在外公館からの情報を外務省でまとめたものでし



⑳ 「内閣総理大臣官房総務課関係資料」 「二、二六事件」中「雑」。二月二九日から三月一日の条。



㉑ 「内閣総理大臣官房総務課関係資料」 「二、二六事件」中「雑」中「宮内省内に勤務中の食事代及び小者への手当支給の件」中「食事代金請求書」

明を公表。午後から閣僚、総務課は宮内庁から引き揚げた、とあります。とりあえずお疲れさまでした。だが、重要な事後処理事務が遺っていました。

宮内省から、二月二六日から三月一日までの食事代の請求(㉑)が来ています。これは高等官の食費だそうで、このほかに一般職員の食費、「小者」と言っています。各職員のサービスに従業してくれた人への謝礼を支払っています。ちゃんと支払っておけば次の時にもまたお世話

## 大事な後始末

今回の事件に対し各国概ね何れも大なる衝動を与へたるを報じ帝国今後の政策の一転機を見るべきに注意を要するを高調し在り。

とのこと。なんでこんな長い文章にするのか、書く方もたいへんだらうと同情します。

まだまだ続くのでご紹介したいのですが、各省、ちゃんとして働いていたことは御了解ください。

内閣総務課の「雑」の記述によれば、二月二九日(土)(㉒)、横溝課長、稲田書記官、三橋書記官らが前日から宮内省に宿泊したそうです。この日の朝、午前五時三十分、「討伐命令下り、一般市民引揚をまつて討伐を開始する」とのこと。午後四時五〇分、岡田首相生存のことを発表。

翌日三月一日の日曜日は十時半から宮中で閣議、陸軍軍

福井 ひとし (ふくい・ひとし) 氏

一九六二年三重県生、東京大学法学部卒、八五年から総務庁、内閣官房、復興庁、沖縄総合事務局等に勤務。内閣府参事官として公文書管理法の制定に参画、その後、福岡大学教授、内閣審議官、国立公文書館理事、日本学術会議事務局長、迎賓館長を経て、二〇二二年から国立公文書館で首席研究官。役人時代、国会予算委員会で答弁、総理と米大統領を先導、そして今、両憲法の原本と毎日一緒に暮らしている、のが人生三大レガシー！（イラストも筆者）



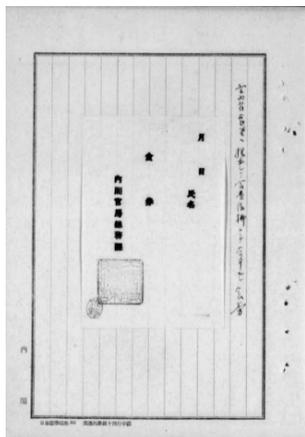
になれるかも。

③⑩ はこんなのも発見したので、字数大オーバーですが、ぜひ御覧ください。

### 雪のむら消え

さて、本稿はやつと三月一日、内閣総務課の宮中からの引き揚げが済んだところまでしか来ませんでした。この日はよく晴れたそう、東京中の雪も融け始めたと思いますが、まだまだ「むら消え」とは言えませぬ。

③⑩の右から二首目。「宮内卿」の作品、うすくこき野辺のみどりの若草に跡まで見ゆる雪のむら消え



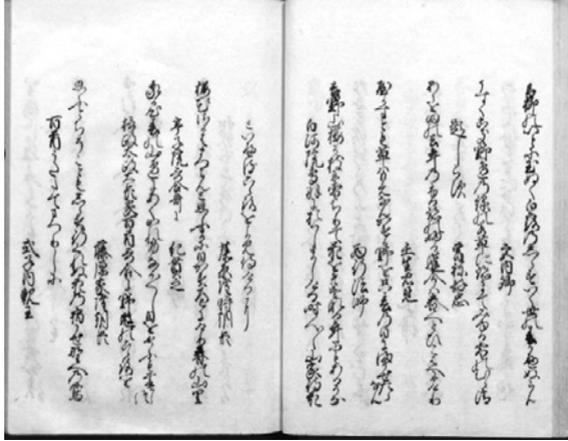
③⑩ 「内閣総理大臣官房総務課関係資料」 「二、二六事件」中「雑」中「宮内省内に勤務中の食事代及び小者への手当支給の件」中「宮内省食堂に提出して食費後払にして食事せし食券」

雪は消えますが、消え方に遅い早があり、その状況が草の萌えかたに残っている——だから、今、春になって、若草の色の薄い濃いを見れば、雪がどんなふうにもだらかに消えていったか、わかりますわよね。

という繊細な感覚で詠まれたうら若い（二十歳前に亡くなったんです）後鳥羽院サロンの天才女流歌人・宮内卿の会心の一作です。遠く七百年を隔てて、二・二六事件の日の雪に譬えれば、事件は終息しても、その影響は各分野に残りました。軍部の専横、戦時経済、言論統制、あるいは国民精神総動員・・・など、これからあと十年、雪は消えてもその跡が消えることはなかった。

編集部にお許しください。来月もう一回二・二六事件を扱わせていただきます。読者諸姉兄におかれてもどうか

御海容あられたい。次回は文官官僚から離れて、事件の「惑星」のような民間人や帝国議会議員について、大事件の「むら消え」を追ってみたいと思いますが、さて如何に。



③「内閣文庫」所蔵「二十一代集 新古今和歌集 上一」より。將軍お手元といわれる紅葉山文庫に入っていた正保四年（一六四七）の刊本です。当時は三代將軍・家光公の代ですね。右から二首目が宮内卿の「うすくこき」読めますか。

（参考資料）

本文中に触れた

横溝光暉「昭和史片鱗」（経済往来社一九七四）

横溝光暉「昭和への遺言」（泰流社一九八六）

安倍源基「昭和動乱の真相」（中公文庫二〇〇六（原書房一九七七））

警視庁神田警察署「神田警察署史——創立一〇〇年記念——」（神田警察署一九七五）

松村謙三「町田忠次翁伝」（町田忠次翁伝記刊行会一九五〇）

寺崎英成等「寺崎秀成御用掛日記・昭和天皇独白録」（文藝春秋一九九二）

五百旗頭真監修「評伝 福田赳夫」（岩波書店二〇二二）

岸信介他「岸信介の回想」（文春学芸ライブラリー二〇一四（文藝春秋一九八一））

のほか、

岡田貞寛編「岡田啓介回顧録」（中公文庫一九八七（毎日新聞社一九七七））

迫水久常「機関銃下の首相官邸」（恒文社一九六四）

美濃部達吉「憲法講話」（岩波文庫二〇一八）

そういえば美濃部さんは事件前の二月二日に襲撃されているんですね。

北博昭「戒厳 その歴史とシステム」（吉川弘文館二〇二五）

当然ながら

国立公文書館デジタルアーカイブ

国立公文書館アジア歴史資料センター（特にアジア歴クロッサリ）

※国立公文書館のみなさん、いつもありがとうございます。スペシャルサンクス。